

# 中国河北省承德市における寺・廟の建設意図の分析

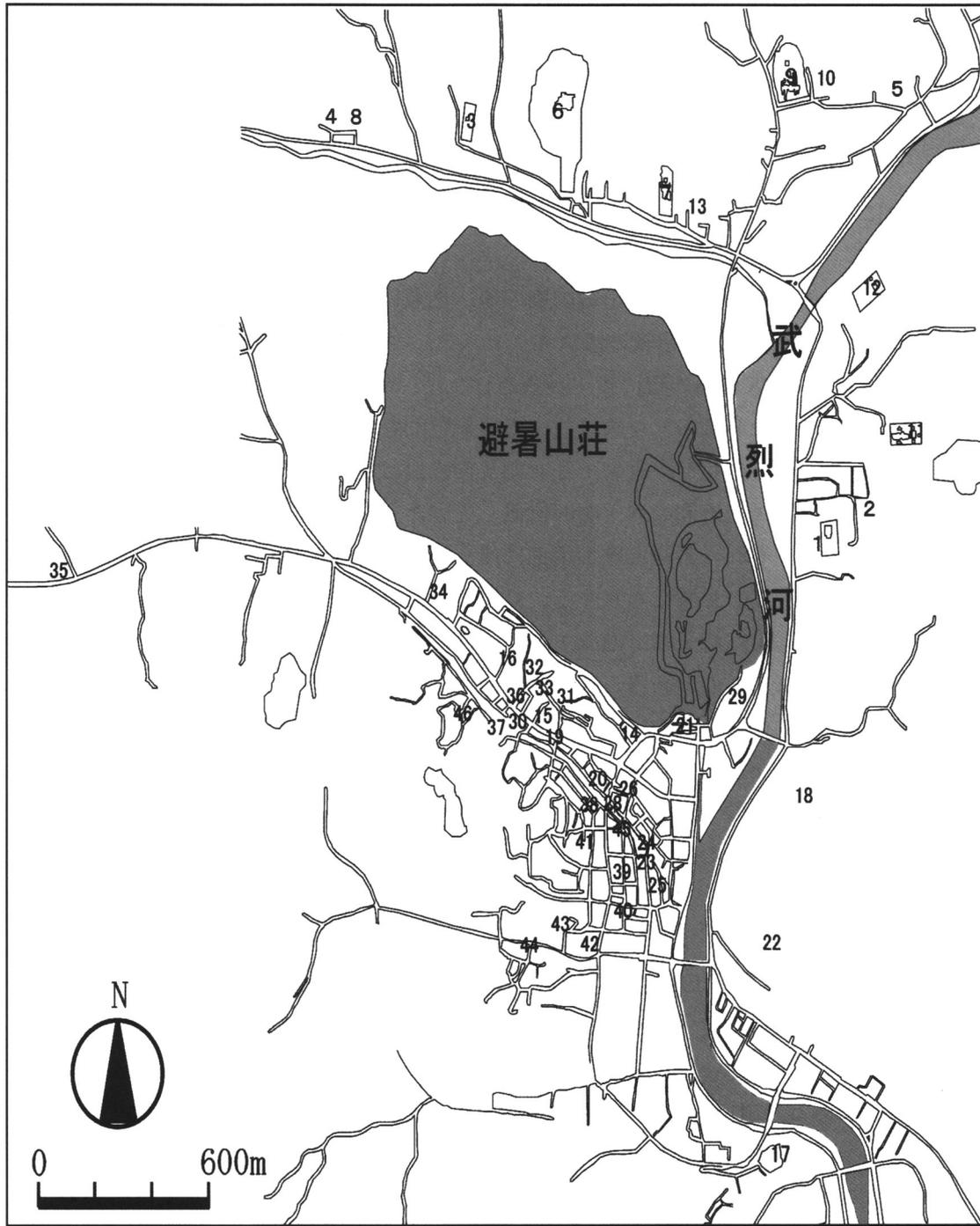
李 海泉

## 1 はじめに

清王朝時代の承德には孔子廟・道教の廟の他、地域の多くの民間信仰の寺・廟、チベットのラマ教の廟（ラマ廟）や回教の清真寺（モスク）、キリスト教教会も存在した<sup>(1)(2)(3)</sup>。1966-1976年の文化大革命の時に多くが壊されたが、現在もその一部が残る。これまでの研究は避暑山荘とその北側のラマ廟に対する建築学的なものであるが、承徳の市街には他にも多くの寺・廟が存在した。避暑山荘北側及び東側はラマ廟が集中し、避暑山荘南側には漢族を中心とした民間信仰の寺・廟が位置していた。この論文は避暑山荘を除いた周辺の地域を対象とし、それらの寺・廟が承徳に建立された意図を碑文から読み取り、都市全体の寺・廟の空間配置の意図を考察する。結果として寺・廟の建立の意図と配置を示すことで、承徳という都市は清王朝が漢族・モンゴル族・満族・回族からなる民族に対してとった政策の反映されたものであることを明らかにする。

公的建築物の建立意図を知るには、碑文が重要な手掛かりとなる。中国寺・廟の先行研究には満州国時代になされた八木奘三郎、村田治郎による研究がある。八木奘三郎の『満州旧蹟志』と村田治郎の『関帝廟建築史の研究』は碑文を利用して、満州の寺・廟建築を考察したもので、寺・廟の満州での拡がりや、漢族の殖民的拡張の歴史と関連するものであることを示した（八木奘三郎 1924）（村田治郎 1930）。承徳に関する重要な文献『熱河』を書いたスベン・ヘディンは解説したわずかな碑文を利用して、ラマ廟の来歴を紹介した（スベン・ヘディン 1943）。民俗学的な研究として、葉濤による『泰山香社研究』がある。泰山に建設された寺・廟の碑文 360 例あまりを収集して分析し、中国泰山信仰の実状を明らかにした（葉濤 2009）。承徳寺・廟の研究としては蘭曉冬の『承徳寺廟』と『承徳寺廟概覧』がある。これは 1980 年代の承徳市文物局による寺・廟調査をまとめたもので、承徳市の寺・廟の概要を知ることができる（蘭曉冬 2000、2008）。

1980 年代には承徳市域に 46 件の寺・廟があった（蘭曉冬 2008）。本論文はその中で官立の寺・廟に残る碑文 14 例を集めて分析した。あわせて、民間信仰の寺・廟について文献調査と聞き取りによる伝承調査を行ない、碑文の明らかでない寺・廟についても分析を行なった。対象とする寺・廟の建立年代は避暑山荘建立から清王朝末期までであるが、日本の研究者による満州時代の文献及び筆者による古老に対しての伝承調査も含めて、中華民国時代までを対象として考察を行なう。



1. 溥仁寺 2. 溥善寺 3. 殊像寺 4. 羅漢堂 5. 広縁寺 6. 普陀宗乘之廟 7. 須弥福寿之廟 8. 広安寺 (戒台寺)
9. 普寧寺 (大佛寺) 10. 普佑寺 11. 普樂寺 (園亭子) 12. 安遠廟 (伊犁廟) 13. 葉王廟 14. 関帝廟 (武廟)
15. 文廟 (孔子廟) 16. 城隍廟 17. 魁星楼 18. 先農壇 19. 文昌閣 20. 火神廟 21. 開仁寺 22. 海雲寺 23. 闕姥閣
24. 竹林寺 25. 普陀禪院 (菩薩廟) 26. 福山寺 (鐘鼓楼) 27. 土地祠 28. 小龍王廟 29. 河神廟 30. 赦孤堂 31. 宏濟寺
32. 北馬神廟 33. 隆興寺 34. 西龍王廟 35. 高廟 36. 節孝祠 37. 南馬神廟 38. 三義廟 39. 三官廟 40. 夏公祠 41. 酒仙廟
42. 九雲頂娘娘廟 43. 忠義廟 44. 魯班祠 45. 東清真寺 46. 西清真寺

図1 承德寺・廟の分布図

表1 热河省承德公安局の宗教寺廟調査表(中華民國21年5月11日)

寺廟名	所在地	建立年代	寺廟名	所在地	建立年代	寺廟名	所在地	建立年代
竹林寺	省会第二区草市街	不詳	財神廟	省会第一区板棚街	不詳	扎什伦布	直轄二分所獅子溝	不詳
斗母宮	省会第二区草市街	不詳	土地祠	省会第二区二仙居街	不詳	布達拉	直轄二分所獅子溝	不詳
南馬神廟	省会第三区梯子山	不詳	財神廟	省会第二区草市街	不詳	殊像寺	直轄二分所獅子溝	1774年(乾隆39年)
城隍廟	省会第三区西大街	1772年(乾隆37年)	酒仙廟	省会第四区大修沟	不詳	普寧寺	直轄二分所獅子溝	1755年(乾隆20年)
隆興寺	省会第三区紅廟山	不詳	馬神廟	省会第一区小西沟	不詳	安遠廟	直轄二分所獅子溝	1764年(乾隆29年)
文昌閣	省会第三区二道牌樓	不詳	三義廟	省会第二区陕西营	不詳	溥善寺	直轄二分所獅子溝	不詳
五火神廟	市街東部	不詳	赦孤堂	省会第三区二道牌樓	不詳	溥仁寺	直轄二分所獅子溝	1713年(康熙52年)
藥王廟	承德公安直轄二分所獅子溝	1755年(乾隆20年)	宏濟寺	省会第三区粮布街	不詳	普樂寺	直轄二分所獅子溝	1766年(乾隆31年)
娘娘廟	承德公安直轄三分所石洞子溝	不詳	北馬神廟	省会第三区北溝	不詳	広縁寺	直轄二分所獅子溝	不詳
関岳廟	省会第一区宫門口	1732年(雍正10年)	関帝廟	省会第三区粮布街	不詳	東清真寺	省会二区五条胡同	1718年(康熙57年)
会安寺	省会第一区小南門	不詳	龍王廟	省会第三区西大街	1755年(乾隆20年)	西清真寺	省会三区潘家溝	不詳
開仁寺	省会第一区小南門	1715年(康熙54年)	海雲寺	直轄一分所会龙山	不詳	天主堂	省会四区四条胡同	不詳
関帝廟	省会第一区小南門	不詳	護国寺	直轄二分所獅子溝	不詳	福音堂	省会二区草市街	不詳
近天禪院	省会第一区火神廟街	不詳	忠義廟	直轄三分所石洞溝	不詳	菩薩廟	省府南胡同	不詳
財神廟	省会第一区興隆街	不詳	雷音寺	直轄三分所石洞溝	不詳	魁星樓	市南半壁山頂	不詳
福山寺	省会第二区二仙居街	不詳	雲峰寺	直轄一分所九華山	不詳	高廟	市西部	不詳
火神廟	省会一區火神廟街	1716年(康熙55年)	三官廟	省会第四区南營子	不詳	広仁寺	市西部	不詳
龍王廟	省会第二区二仙居街	1760(乾隆25年)	文廟	省会三区西大街	1776年-1779年(乾隆41年-乾隆44年)	二郎廟	市街三道牌樓	不詳

## 2 寺・廟の位置

承徳の寺・廟の数と位置を知る資料として、1932年に熱河省承徳公安局が出した「熱河省承徳公安局宗教調査表」(表1)がある<sup>(4)</sup>。これによると全部で54件があがっている。その内訳は避暑山荘の北にラマ廟が9件、避暑山荘の南に道教と基層民間信仰の廟が41件ある。他に回教の清真寺が2件、キリスト教教会が2件である。その中で住職あるいは教主がいるのは32件、無住職の小規模廟は11件である。残りは管理者の有無について記入されていない。

1980年代に河北省承徳市文物局は寺・廟調査を行なった<sup>(5)</sup>。この時点では1932年調査の主要な寺・廟の所在はほとんど確認できたが、いずれの寺・廟にも神は祭られていなかった。「文化大革命」で破壊されたためである。住職も全部追い出され、ほとんどの寺・廟建築には一般市民が住んでいた(蘭曉冬 2008:145-180)。図1は2010年時点の地図上に1980年代の承徳市文物局調査結果を元に、寺・廟の位置を示したものである。表2は各寺・廟の記録から建立の年代順に並べ信仰対象及び立地する大まかな位置を示したものである<sup>(6)</sup>。

同じ属性の寺・廟がまとまって立地し、大きく3つのゾーンに分けることができる。避暑山荘を中心にして、ラマ廟が並ぶ北及び東側の地区Aと南側の地区に分けることができ、南側の地区はさらに避暑山荘の壁に沿って建つ官立の廟の地区Bとその南に広がる一般庶民居住地区に該当する地区Cに分けることができる。表1から、まず建設された建物は康熙帝の時、避暑山荘南側の一般庶民居住地域に位置する、民間によって建設された漢族の信仰する廟であることがわかる。そして、1713年(康熙52年)から避暑山荘の東側にラマ廟の建設が始まる。康熙帝、雍正帝、乾隆帝の時代と続けられ、1780年(乾隆45年)まで、避暑山荘の東側と北側にモンゴル族やチベット族のために一連のラマ廟の建設がなされる。地区Aのラマ廟建設は、清王朝の「民族懐柔」の政治構想にもとづくものである。この建立の意図は康熙帝の時代と乾隆帝の時代では異なり、第4章の碑文分析によって詳しく考察する<sup>(7)</sup>。乾隆帝の時代には、皇帝の勅諭により地区Bへの城隍廟、文廟、関帝廟からなる漢族廟の建設が行なわれる<sup>(8)</sup>。これらの建築は漢族の都市を象徴するものである。地区Cには漢族、回族のための民間信仰の寺・廟が多く作られた。火神廟、酒仙廟、文昌廟、魁星楼、南馬神廟、河神廟、娘娘(ニャンニャン)廟が主な漢族の廟である。回族の清真寺(モスク)は地区Cに2箇所建設された。1箇所は初期の1718年(康熙57年)に建てた東清真寺である。その後、回族移民が増えて、1765年(乾隆30年)にもう1箇所の西清真寺が建てられた。承徳古老の伝承によれば、承徳の回族移民はサービス業に従事していたため、清真寺(モスク)はその居住地区である避暑山荘南側の地区Cに自発的に建設されたという<sup>(9)</sup>。

2010—2011年、筆者の行なった調査で避暑山荘の北にラマ廟は9箇所確認できたが、避暑山荘の南地区B及びCは1992年頃からの大規模な都市開発で多くの道教と民間信仰の

寺・廟は破壊され、9箇所しか確認できなかった<sup>(10)</sup>。

### 3 寺・廟建立の背景

1644年、満族の清王朝は長城を破り、北京、そして中原を占拠した。清王朝は秦朝から明朝まで約2000年間続けた長城構築を中止した、第二代目の康熙帝は長城という壁の限界を認識し、明確に長城を使わない理念を定めた<sup>(11)</sup>。清王朝は明朝を倒したが、明朝以前からモンゴルの部族が長城外に勢力を保っていた。清王朝はモンゴル各部族に対応するにあたり、長城の外側にあつて、モンゴルが管轄する承德という地域を重視した。承德は都を置く北京の近隣であり、その北はモンゴル草原と接するところに位置している。清王朝は長城の南の北京に入る前後の時期には、モンゴル部族と特殊な同盟関係をもっていた。ある意味では満族の清王朝は横取りの形で中原を治めたことになる。ゆえに清王朝は特殊な同盟関係をもつモンゴル族に対して特権の地位を与えると同時に防ぐ対象とも位置づけた。チベット及びモンゴルの民族はラマ教を崇拝しており、清王朝はラマ教を利用し、国の安定を図ろうとした<sup>(12)</sup>。

寺・廟成立の歴史的背景を分析した伊東忠太によれば、承德はもともと「異民族」ばかりの地であつて、漢の文化にはかかわりのないところであつたという（伊東忠太 1936：13-17）。清王朝時代に書かれた地誌『熱河志』によれば、この土地は多くの北方民族が治めており、通古ス（ツングース）とモンゴル混種の遼、通古ス系の金、モンゴル系の元が治め、漢族の治める明朝には統治外の地となつていたが、清王朝になつて再び領土となつたと記されている<sup>(13)</sup>。

清王朝に入り、承德は雍正元年（1723年）熱河庁、雍正11年（1733年）承德州、乾隆43年（1778年）承德府など行政区域の位置づけを変えながら発展していく。伊東忠太は、通古ス（ツングース）系少数民族の満族による清王朝によつて承德ははじめて行政編成のなかに入ったことになり、漢土に再び組み入れられたとき、漢文化を象徴する文廟、武廟、城隍廟が設けられることになつたと分析している<sup>(14)</sup>。通古ス系満族の清王朝は国家政権が安定した後、漢族文化重視の文化政策による発展を目指したのである。

鳥居龍蔵は、清王朝は満州族という小規模な民族人口であり、全土に満州人（満州八旗）を配置することはできなかったため、それまでの漢族による官僚制度を踏襲し、あわせて背景となる儒教の倫理観をそのまま踏襲したと分析している（鳥居龍蔵 1914:141-149）。同時に、北方のモンゴル族及び西方のチベット族の懐柔のため、彼らの信じるラマ教を優遇した。また、人口の多い漢族は清王朝以降になつて、山西省・山東省から中国東北地域に進出したと鳥居は記述している。

以上の清王朝の政策は承徳の寺・廟建設の背景ともなつている。すなわち、地区Aのラマ廟はチベット・モンゴル族懐柔のためであり、地区Bの漢族官立廟は漢化という文化政策の現れである。地区Cの多くの漢族関連の廟は商人を中心とした漢族人口の増加による

自発的建設である。

表2 1980年代調査の寺・廟の建立年代と信仰対象

通番	番号	廟名	建設年代	年号	神	建設場所
1	24	竹林寺	1704	康熙43年	菩薩、土地など	C
2	20	火神廟	1711	康熙50年	火神、弥勒佛	C
3	21	開仁寺	1711	康熙50年	観音など	C
4	43	忠義廟	1713	康熙52年	劉備、関羽、張飛	C
5	1	溥仁寺(前寺)	1713	康熙52年	無量寿佛(ラマ教)	A
6	2	溥善寺(後寺)	1713	康熙52年	仏像(ラマ教)	A
7	22	海雲寺	1713	康熙52年	観音など仏教、道教の神	C
8	45	東モスク(清真寺)	1718	康熙57年	古蘭教	C
9	14	関帝廟(武廟)	1732	雍正10年	関羽、劉備、張飛、岳飛	B
10	41	酒仙廟	1736	乾隆元年	呂洞賓、杜康、劉伶	C
11	30	赦孤堂	1736	乾隆元年	孤魂など	C
12	9	普寧寺(大佛寺)	1755	乾隆20年	千手千眼観音(ラマ教)	A
13	13	薬王廟	1755	乾隆20年	孫思邈、扁鵲、華佗、張仲景、王叔和	A
14	39	三官廟	1755	乾隆1755年	天官、地官、水官	C
15	10	普佑寺	1760	乾隆25年	釈迦牟尼(ラマ教)	A
16	12	安遠廟(伊犁廟)	1764	乾隆29年	緑度母(ラマ教の女神)	A
17	46	承德西モスク(清真寺)	1765	乾隆30年	古蘭経	C
18	11	普樂寺(園亭子)	1766	乾隆31年	壇城(ラマ教)	B
19	6	普陀宗乘之廟(ブダラ宮)	1767-1771	乾隆32年-36年	宗喀巴	A
20	8	広安寺(戒台寺)	1771	乾隆36年	仏像(ラマ教)	A
21	16	城隍廟	1772	乾隆37年	城隍、乾隆皇帝の叔父	B
22	3	殊像寺(家廟)	1774	乾隆39年	文殊菩薩	A
23	4	羅漢堂	1774	乾隆39年	仏教の羅漢像	A
24	15	文廟(孔子廟)	1776-1779	乾隆41年-44年	孔子	B
25	5	広縁寺	1780	乾隆45年	仏像(ラマ教)	A
26	7	須弥福寿之廟(大紅台)	1780	乾隆45年	釈迦牟尼	A
27	19	文昌閣	1821	道光元年	文曲星	C
28	17	魁星楼	1828	道光8年	魁星	C
29	38	三義廟	1845	道光25年	劉備、関羽、張飛、趙雲	C
30	25	普陀禪院(菩薩廟)	1851	咸豊元年	観音など仏像	C
31	31	宏濟寺	1875	光緒元年	西王母	C
32	26	福山寺(鐘鼓楼)	清朝末期	不明	関羽	C
33	32	北馬神廟	清朝末期	不明	馬神	C
34	33	隆興寺	清朝末期	不明	劉備、関羽、張飛	C
35	27	土地祠	清朝	不明	土地	C
36	28	小龍王廟	清朝	不明	龍王	C
37	29	河神廟	清朝	不明	河神	C
38	36	節孝祠	清朝	不明	評判の良い女性の位牌	C
39	18	先農壇	不明	不明	神農、炎帝	C
40	3	斗姥宮	不明	不明	斗姥、道教の女神	C
41	34	西龍王廟	不明	不明	龍王	C
42	35	高廟(関帝廟)	不明	不明	関帝	C
43	37	南馬神廟	不明	不明	馬神	C
44	40	夏公祠	不明	不明	夏熙	C
45	42	九雲頂娘娘廟	不明	不明	碧霞元君(泰山娘娘)	C
46	44	魯班祠	不明	不明	魯班	C

注：・建設場所の記号 A：避暑山荘北側及び東側に位置する官立の寺・廟 B：避暑山荘南側に位置する官立の寺・廟 C：避暑山荘南側の庶民居住地区に位置、民間によって建設された寺・廟を示す。この表は1980年代に実施された承德市文物局による調査データを元に作成した(蘭曉東『承德寺廟概覽』中国戯劇出版社、2008)。ほかに李景瑞編著『承德古代史』民族出版社、2009を参考にした。・番号は図1承德寺・廟の分布図と対応するものである。

表3 寺・廟の建設意図

番号	廟名	建設年代	年号	碑文及び聞き取り資料による来歴。( )内は碑文の記載者、引用文献又は聞き取り者を示す。巻末資料は碑文原文の該当カ所を巻末に示したことを示す。	方位	場所、( )内は表図1に示した地区
1	溥仁寺	1713年	康熙52年	康熙皇帝の60歳誕生日を祝うため、モンゴルから来た貴族首長たちが廟を寄付したいとの申し出があった。(碑文1・康熙帝・巻末資料)	南	避暑山荘の東側(A)
22	海雲寺	1713年	康熙52年	武烈河から船に乗る人と船を引っ張る人が集まるところ、出発する前に参拝していた。(承德市古老尹からの聞き取り)	南	武烈河のそばにある会龍山上(C)
45	東清真寺	1718年	康熙57年	承徳に住む回教の人々における清真寺は毎日の祈りおよび冠婚葬祭に必要があり、また教徒を啓示するためである。(碑文2・承德掌教馬・巻末資料)	東	承徳の繁華街(C)
14	関帝廟 (武廟)	1732年	雍正10年	1778年(乾隆43年)勅諭により避暑山荘の正門前にあった関帝廟を盛大に再建築した。清朝政府は「忠」「義」、上下秩序など中原倫理を高揚、普及する目的である。(碑文2・大臣 梁国治・巻末資料)	南東	避暑山荘正門麗正門の西200メートル(B)
41	酒仙廟	1736年	乾隆元年	各業界の職人の祖の位牌が祭られ、職人が参拝する廟である。酒仙は酒が好き超能力の仙人であり、全国に広がっている。(市民からの聞き取り)	東	避暑山荘の南の山上(C)
9	普寧寺 (大佛寺)	1755年	乾隆20年	西北のモンゴルジュンガル(準喀爾)部族叛乱を収めたのを記念し、協力していたモンゴル阿魯特部落を承徳に招いたため。「安寧」を強調する。(碑文1・乾隆帝・巻末資料)	南南東	避暑山荘の東北にある山の斜面(A)
10	普佑寺	1760年	乾隆25年	西北紛争の際に焼失した宗教聖地の固爾扎廟の釈迦牟尼像を再造し、承徳普佑寺に安置した。(文献1、2)	南南東	避暑山荘の東北(A)
12	安遠廟 (伊犁廟)	1764年	乾隆29年	西北のモンゴル達什達瓦部族6000人が承徳に移住し、宗教礼拝のため安遠廟(伊犁廟)を建設した。達什達瓦部族の宗教聖地新疆ガルザ(固爾扎廟)(伊犁廟)は紛争の中で焼失した。その復興が目的である。(碑文1・乾隆帝・巻末資料)	南西	避暑山荘の東北にある山上(A)
46	西清真寺	1765年	乾隆30年	乾隆期に承徳への回族の移民が多く増えて、東モスクだけでは足りなくなった。(文献1、2)	東	回族の集中居住地(C)
11	普樂寺 (園亭子)	1766年	乾隆31年	西北の民族紛争が収まり、哈薩克、布魯特など部族が承徳に謁見しに来ていた。皇帝は「国師」である章嘉ラマと相談して、この人々が参拝するために「普樂寺」を建てることを決めた。西北部の人々の「安定」「安遠」の後に「安樂」を意味する。(碑文1・乾隆帝・巻末資料)	西	避暑山荘の東側の山上(B)
16	城隍廟	1772年	乾隆37年	城隍神は除災の機能を持ち、都市住民の生活を守護できる神であり、祭祀すべきである。(碑文2・乾隆帝・巻末資料)	南東	文廟の西約300メートルに位置する(B)

3	殊像寺	1774年	乾隆39年	山西省五台山の「殊像寺」は文殊菩薩を祭るところである。それを真似して承德殊像寺を造ったのである。(碑文1・乾隆帝・卷末資料)	南南 西	避暑山荘の 北側(A)
15	文廟(孔子廟)	1776年— 1779年	乾隆41年— 乾隆44年	承德は北京に近いが長城の外側にあり、以前の王朝の文化教育はこの地に届かなかった。長年の開発で、承德はもう都会になり、孔子を祭る文廟およびそれに関連する学校の開設は必要になったことを実感した。(碑文・乾隆帝・卷末資料)(碑文2・大臣 梁国治・卷末資料)	南西	避暑山荘南 にある西大 街(B)
7	須弥福寿之廟	1780年	乾隆45年	班禅ラマが皇帝70歳の誕生祝いのため来訪することにあわせて活動拠点のチベット札什倫布寺を作る。(碑文1・乾隆帝・卷末資料)	南南 西	避暑山荘の 北側(A)
17	魁星楼	1828年	道光8年	文章を管理する道教の神「魁星神」を祭る。承德文化の繁昌を輝かせる。(碑文・大臣 英和・卷末資料)	南南 西	避暑山荘の 南の山上に (C)

(注1: 卷末資料を参考。碑文原文は碑文1『熱河志』、碑文2『承德府志』及び文献1、2に掲載されたものを用いた。魁星楼碑文は筆者が収集したものである。注2: 方位は建物の面する方向である。文献1: 承德寺廟、蘭曉冬(編)、2000年; 文献 2: 承德寺廟概覽、蘭曉冬(編)、2008年)。

#### 4 承德寺・廟の建設意図の推移

承徳の寺・廟建設は長い清王朝の時代の中でどのように推移したのかを碑文を通して分析する。

表3は2010年に確認した現存する寺・廟の来歴・建設意図をまとめたものである。碑文のあるものはその記載された内容からまとめ、碑文のないものあるいは不明なものについては文献又は伝承をもとにまとめ、建設年代順に並べた。資料の中の番号は図1及び表2の番号と対応している。

避暑山荘建設の初期にはそれぞれの民族が自集団のために寺・廟を建てている。例えば、番号1の康熙52年(1713年)建てられた「溥仁寺」は、皇室に関係するラマ廟のなかで一番早く建築された。モンゴル族は皇帝に対し恭順の意を示し、自らが建設した。碑文によると、「康熙52年(1713年)は長城の中に入ってから二代目の皇帝であり、避暑山荘の建設を決めた康熙帝の六十歳生誕の年であり、モンゴルの各部落の首長たちはその祝いのために承徳を表敬し、康熙帝の生誕を祝うためにラマ廟を作ることを申し出た。康熙皇帝は避暑山荘の東側で溥仁寺を建造することを許可した」と記されている。

雍正10年(1732年)、承徳地方の商人を中心とする庶民が避暑山荘の正門前に番号14の「関帝廟」を建造した。その庶民建設の廟を勅諭によって改築している。碑文によると、

「乾隆 43 年 (1778 年) に乾隆帝は熱河庁を承德府に昇格することを命じた。その年 (1778 年) の 5 月に皇帝は勅諭をくだし、麗正門の右側の「関帝廟」を作り直すことにした」と記されている。皇帝が漢文化の象徴的寺・廟の建設を押し進めたことがわかる<sup>(15)</sup>。同様に、番号 16「城隍廟」は「都市住民の生活を守護できれば」、番号 15「文廟」は「都市になり、文廟及び学校の開設は必要」と乾隆帝は碑文に書いている。

乾隆帝の頃になると、チベット族、モンゴル族のために皇帝が寺・廟を建立する意図が明白になる。例えば乾隆 20 年 (1755 年) につくった番号 9「普寧寺」は、碑文によると「乾隆 20 年 (1755 年) 5 月、乾隆帝はダワギをはじめとするモンゴルのジュンガル部落の叛乱を治め、10 月に避暑山荘で盛大な祝賀会を行った。この事件を記念して、避暑山荘の北の山の麓に『普寧寺』を建設した」と記されている。乾隆 29 年 (1764 年) に建立した番号 12「安遠廟」は、碑文によると「清王朝の軍隊がモンゴルのアムルサナ部落の叛乱を平定し、伊犁を収めた。その城を修復したが、固爾扎廟 (ガルザ廟) は破壊されて、修復は不可能になり、無理に復元する必要もない。承德避暑山荘はすでに狩猟行事と諸藩謁見のところになっているので、避暑山荘の東北にある山の上に、「伊犁固爾扎廟」を模して、この廟を作った」と記されている。いずれもモンゴル族懐柔のための清王朝による廟建築であることが明らかである。

避暑山荘建設の最初から清王朝末期にわたって作られた廟は都市内の民間の需要であり、漢族及び回族の基層的民間信仰に関するものである。たとえば道光 8 年 (1828 年) に建立した道教の廟の番号 17「魁星楼」は、文章を管理する道教の神「魁星神」を祭る。「魁星楼」の建設意図について碑文には「承徳の文化の繁昌を輝かせる」との趣旨が強調されている。そして、「地方の有力者たちは地方政府の協力を得て積極的に『魁星楼』の建立を推進した」と記されている。この廟では農業のための雨乞いも行なわれていた。このような民間のための廟は川の運航にかかわる番号 22「海雲寺」、職人にかかわる番号 41「酒仙廟」がある。1932 年及び 1980 年代の調査では多くの基層的民間信仰に関する廟が存在したことが示されているが、廟の信仰の詳細については今後、伝承調査などで明らかにする予定である。表 2 から明らかのように、1980 年代までに避暑山荘南側庶民居住地区 (地区 C) に残っていたいくつかの漢族の廟は、1703 年の避暑山荘建設が始まってから早い時期に建てられた。その建設の主体は商人を中心とした庶民であった。ラマ廟の建設がまだ始まっていなかった頃のことである。この都市の統治者すなわち皇帝は北方の満族であるが、まず町づくりを行なった主体は漢族及び回族であることを示している<sup>(16)</sup>。

## 5 まとめ

承德の大規模な造廟は、清王朝が少数民族の立場から複雑な民族関係の打開及び漢化を意図したことを碑文の分析及び文献・伝承から明らかにした。

1. 避暑山荘建設が始まった康熙帝初期には、避暑山荘南側 (地区 B、C) に漢族の商人を

中心とした寺・廟建設が行なわれた。次に、康熙帝から乾隆帝時代にかけて、チベット族・モンゴル族の懐柔策として、避暑山荘東側・北側（地区 A）にラマ廟が建設された。チベット・モンゴル族懐柔策はさらに 2 つに分かれる。康熙帝時代はモンゴル族側の恭順の意志としてラマ廟が建設され、乾隆帝時代は清王朝側のチベット族・モンゴル族に対する懐柔のためラマ廟が建設された。

2. 乾隆帝の時代には、漢族都市の文化的象徴として、文廟、城隍廟が官立として建設された。さらに、民間廟であった関帝廟も皇帝の勅諭によって修築された。
3. 漢族を中心とした民間廟は民衆人口の増大にあわせて清王朝初期より避暑山荘南側 C 地区に建設された。

承德は清王朝によって新しく作られた都市であり、そこでの信仰対象物の建設意図を分析することで、都市成立の一側面を分析することが出来た。清王朝のはじめから中華民国の時代までの承德は清王朝がとった民族懐柔と政策的・文化的漢化の方針が空間的に反映された都市であったと言える。

#### [注]

- (1) 承德避暑山荘の建設は康熙帝の時代 1703 年から乾隆帝の時代 1790 年まで行なわれた。
- (2) 中国での宗教的建物の一般的呼称は道教の神を祭る場所を「廟」と呼び、佛教寺院を「寺」と呼ぶ。チベットラマ教の寺院は「ラマ廟」という。回族のモスクは「清真寺」という。本論文では宗教的建物全体の呼称を「寺・廟」とした。
- (3) 民間信仰は、庶民の基本的な生活実践と関連するもので、庶民によって信仰対象の寺・廟が建造され、庶民によって維持されてきた。代表的なものに火神廟、酒仙廟、娘娘廟がある。避暑山荘南の市街区に漢族の廟だけではなく、モンゴル族や回族の寺・廟やキリスト教の教会も存在する。基層民間信仰の寺・廟とは清王朝を始めとする官立の寺・廟以外のものを示す。
- (4) 「熱河省承德公安局宗教調査表」は承德市回族の長老張達馳（1930 年生まれ・故人）が書いた『承德史話』（黒龍江美術出版社、2000）に掲載されたものである。承德公安局とは当時の警察であり、寺・廟および信仰状況を把握するために行なったものと思われる。
- (5) 1980 年代の調査結果は公的にはまとめられていない。調査は 1986 年から 1991 年にかけて実施された。調査に参加した承德市文物局研究員蘭曉冬は調査ノートに基づいて『承德寺廟』と『承德寺廟概覽』二冊の本を纏めた。
- (6) 表に示す寺・廟の建設年代は蘭曉冬編著『承德寺廟』（黒龍江美術出版社、2000）、蘭曉冬編著『承德寺廟概覽』（中国戯劇出版社、2008）と李景瑞編著『承德古代史』（民族出版社、2008）による。
- (7) 寺・廟の碑文は『熱河志』と『承德府志』両誌に載せられているもの、及び筆者が収集したものを元とし、現代中国語及び日本語に訳し、分析した。
- (8) 関帝廟（武廟）は 1732 年（雍正 10 年）に B 地区に建設されているが、これは漢族商人による建設である。この建物が 1778 年（乾隆 43 年）に勅諭により官立のものとして改築された。
- (9) 張達志、（回族、1932 年生まれ）から話を聞いた。

- (10) 2010-2011 年の間、筆者はいままでの資料にもとづいて、現地踏査を行ない、寺・廟の存続利用状況を確認した。大規模な都市開発は 1992 年頃から始まった。
- (11) 「……夫天地既生此以限南北則秦之為長城益可笑矣」(『熱河志』卷 1、「天章」、1782 年)。
- (12) 『中国北方民族関係史』によれば、清王朝支配者はモンゴル族がラマ教を狂信することを承知しており、モンゴルとの関係を図るため、大量にラマ廟を修築した。承德避暑山荘の周辺では、普寧寺、普佑寺、安遠廟、普樂寺、広安寺、羅漢堂、普陀宗乘之廟、須弥福寿之廟と言った壯観華麗なラマ廟を建造した。毎年避暑山荘に清王朝皇帝に謁見しに来るモンゴル首長貴族たちが参拝したと書かれている(中国北方民族関係史編纂組 1987: 426-428)。
- (13) 『熱河志』卷 55-63、「建制沿革」(1782 年)。
- (14) 可児宏明は、かつて漢土の伝統都市には必ず文廟、武廟、城隍廟という官立の廟が設けられたと書いている(可児宏明 昭和 59 年)。一方、清王朝の皇室は、城宮内に「堂」を作り、満族の信仰である薩満教の儀礼を行なったことを村田治郎は『北方民族の古俗』で明らかにしている(村田治郎 1975: 174-189)。承德には「堂」は建造されていない。承德周辺に居住する満族農民の間では薩満教が復活しつつあるが、廟のような建造物は作らない。
- (15) 関帝廟と同系のもは承德市内に多く作られており、基本的には基層民間信仰の廟として位置づけられる。
- (16) キリスト教は清王朝光緒帝(1875-1908)の末期に教会が建設され布教が始まった。

#### [参考文献]

##### 日本語

- 伊東忠太、昭和 8 年、『満州の文化と遺跡の史的考察』、啓明会。
- 伊東忠太、昭和 11 年、『熱河遺跡の建築史的価値』、啓明会。
- 伊東忠太、昭和 15 年、『道教思想とシナ建築芸術』、啓明会。
- 五十嵐牧太、昭和 17 年、『熱河古跡と西藏芸術』、洪洋社。
- 可児宏明、昭和 59 年、「伝統中国の祭り」、宮田登代表『暦と祭事』、小学館。
- 八木柴三郎、大正 13 年、『満州旧蹟志』、南満州鉄道株式会社。
- スベン・ヘディン、昭和 18 年、『熱河』、黒川武敏訳、地平社。
- 瀧澤俊亮、昭和 57 年、『満州の街村信仰』、第一書房。
- 鳥居龍蔵、大正 4 年、『蒙古及満州』、富山房。
- 村田治郎、昭和 5 年、『関帝廟建築史の研究』、満州建築協会(社団法人)。
- 村田治郎、昭和 50 年、『北方民族の古俗』、私家版。

##### 中国語

- 中国北方民族関係史編纂組、1987、『中国北方民族関係史』、中国社会科学出版社。
- 蘭曉冬(編)、2000、『承德寺廟』、黒龍江美術出版社。
- 蘭曉冬(編)、2008、『承德寺廟概覽』、中国戯劇出版社。

『熱河志』、1782（乾隆46年）。

許慎、『說文解字』、2009、中華書局。

『承德府志』、1829（道光9年）。

葉濤、『泰山香社研究』、2009、上海古籍出版社。

#### [卷末資料]

1、溥仁寺「康熙五十二年朕六旬誕辰眾蒙古部落咸至闕廷奉行朝賀不謀具疏陳懇愿建刹宇為朕祝厘……」。  
45、東清真寺「冠婚表祭一皆定之以禮……每日按時面西誦經禮拜以祈雨順風調盤凶水固……俾成登善良仰沐聖化……」。14、關帝廟「乾隆四十三年是月復詔協辦大學士尚書英廉侍郎和坤重修麗正門右關帝廟改易黃瓦殿宇崇闕規制大備……就廟貌之成可以見國家褒崇忠義凜平常名教之大焉可以使遠近更易觀聽動其嚴威嚴恪之忱焉」。9、普寧寺「乾隆二十年五月平定准格璽冬十月大宴賚四衛星拉特部落旧附新歸之眾于避暑山莊……臣庶咸愿安其居其業永普寧雲璽」。12、安遠廟「伊犁河北旧有廟……而梵宇之仅存煨烬之余者已不可复整亦不必為之复整也因思山莊為秋蒐肆觀之所旧番新附絡繹鱗集……」。11、普樂寺「乾隆乙亥西陲大功告成衛特拉各部長來會……諮問之章嘉國師雲……是朕所由繼普寧安遠而命之為普樂者」。6、普陀宗乘之廟「歲庚寅為朕六秩慶辰辛卯恭遇聖母皇太后八旬万寿自旧隶蒙古喀爾喀青海王公台吉等暨新附準部回城眾蕃長連軫偕徠驢馱祝嘏」。16、城隍廟「神之号為城隍方隅是保虵庶必有默相之者不記雲乎有功于民能捍災御患則祀之」。3、殊像寺「辛巳春奉聖母幸五台祝厘，瓣香頂礼默識其象以歸……茲于山莊普陀宗乘廟西宮構蘭若」。15、文廟「夫熱河固自古关塞以外荒略之区也此而天學以牖迪俗芑宣祖猷揚聖化之道……則茲文廟之建于時于地胥不可緩」。7、須彌福壽之廟「今之建須彌福壽之廟于普陀宗乘之左岡者以班禪額爾德尼欲來觀而肖其所居以資安禪……夫朕七旬不欲為慶賀繁文已預頒諭旨」。17、魁星樓「設魁像于重上層樓峨峨峽影堂隍迹拱宸極遠傍帝鄉騰輝壁府耀我文昌」。

所属：中国 中国人民大学人類学研究所

E-Mail アドレス：ahxlee@gmail.com